

かつて、なにわにこんな中医学があった
—中島随象の遺産—

山本巖と中医学

Chinese Medicine in Naniwa from 1970's to present days.
—Inherited Genes from Zuisho Nakajima—

日笠 久美
Kumi Higasa

河崎医院附属淡路東洋医学研究所，兵庫，〒656-0428 南あわじ市榎列掃守 22-5

Awaji Oriental Medicine Research attached to Kawasaki-iin,
22-5, Kamori, Enami, Minamiawaji-shi, Hyogo, 656-0428, Japan

抄録

戦後日本を代表する漢方家である山本巖先生（1924～2001）は，西山英雄先生から古方，中島随象先生から一貫堂を中心とした後世方漢方を学んだ。その後1989年に，新しい形態の漢方医学である第三医学研究会を設立するにいたった。

山本先生に中医学のイメージは薄い，改めて調べてみると，『中医学基礎』に推薦文を書き，『東医雑録』にも中医学的な知識が多く記載されており，『中医処方解説』でも監修として参加している。おそらく日本に現代中医学が輸入された黎明期に，仲間と切磋琢磨しながら中医学を学んでいたことは間違いない。

日本や中国の古典を独学し，古方や後世方を深く学び，最新中医学知識も学習したうえで，日本漢方，中医学には飽き足らず，第三の漢方医学という独自の漢方観を確立したことを再認識した。

山本漢方の特徴は，患者の病態を，西洋・東洋の垣根を作らず西洋医学的病因病理で捉えて，それに漢方理論や療法を当てはめたり，漢方理論を西洋医学的に説明したりするものである。その基礎として，漢方生薬の薬能，生薬の組み合わせからの薬能の変化を理解して漢方処方を運用し，患者の病態に適応するように漢方薬を加減・合方することの大切さを説かれている。ご自身に深く多彩な漢方知識や西洋医学知識があったことで，精度の高い独自の漢方臨床が実現したと思われる。

キーワード：中医，第三医学研究会，山本漢方，一貫堂，漢方生薬

Abstract

Iwao Yamamoto (1924-2001), one of the leading Kampo masters in post-war Japan, educated himself in Japanese and Chinese classics and studied Koho school and Gosei school and Ikkando branch in depth. In 1989, he founded his own new school of Kampo medicine called the Academic Society of the Third Medicine (第三医学研究会). He wrote a testimonial in The Basics of Chinese Medicine (中医学基礎), acted as editor-in-chief of A Manual for Prescribing Chinese Medicine (中医処方解説), and published his own monogram called A Miscellaneous Record of Eastern Medicine (東医雑録) that shows his deep knowledge of traditional Chinese medicine. He and his friendly rivals must have studied traditional Chinese medicine extensively soon after it was imported to Japan and brought about the dawn of Kampo medicine. He then furthered his studies and established his own Kampo philosophy. The distinguishing feature of Yamamoto Kampo is to analyze patients' conditions using the etiological and pathological methods of Western medicine and treat them with Eastern methods, or explain Kampo theories using Western medical methods. He stresses the importance of prescribing Kampo drugs by understanding the efficacy of crude Kampo drugs and altered efficacy of them when they are mixed in different combinations. There is no doubt that his wide and deep knowledge of Kampo medicine led him to establish his own clinical Kampo applications.

key word : traditional Chinese medicine (中医学), the Academic Society of the Third Medicine (第三医学研究会), Yamamoto Kampo (山本漢方), Ikkando branch (一貫堂漢方), crude Kampo drugs (漢方生薬)

山本巖先生の東洋医学的歩み

山本巖先生(1924～2001)は戦後日本を代表する漢方家である。鶴田光敏先生の『山本巖の漢方療法』によると、1952年に徳島大学を卒業されたが、在学中の1943年頃から、レントゲン科牧野利三郎教授により漢方および鍼灸に開眼。漢方の薬物療法ならびに鍼灸の指導を受け、同時に同教室の鍼灸師吉成十次氏に就いて実地修練を重ねたとある¹⁾。卒業後、1955年頃から独自で中国伝統医学、台湾医学、朝鮮医学を学習された。

1961年、大阪に診療所を開設。1964年に西山英雄先生に入門し『傷寒論』や『金匱要略』を中心とした古方を勉強したが、西山先生から曲直瀬道三の『衆方規矩』は実践書であると聞かされた。その後に出会った森田幸門先生にも、実際の臨床では古方よりも後世方の学習を勧められたこともあり、矢数格著『漢方一貫堂医学』で一貫堂漢方を独学。それ程、一貫堂を学びたいならと、西山先生から一貫堂の大家である中島随象先生を紹介され、1968年から中島随象先生の漢方舎で一貫堂および後世方漢方を学ぶ。しかし、本から学んだ一貫堂漢方と、中島随象式一貫堂は大きく異なっていたという。中島先生が不問診で、ずばりと診断を下す姿に驚いたと『東医雑録』には書かれている²⁾。

その後、山本先生は1989年に第三医学研究会を設立し、従来の日本漢方や中医学、西洋医学の弱点を補い、知識として積み上げられる、新しい形態の漢方医学の方向性を明確にし、2001年に永眠された。

- 1943 • レントゲン科牧野利三郎教授により漢方及び鍼灸に開眼。漢方の薬物療法ならびに鍼灸の指導を受けた。同教室の鍼灸師吉成十次氏に就いて実地修練を重ねた。
 - 1952 • 徳島大学医学部卒業。
 - 1955 • 中国伝統医学、台湾医学、朝鮮医学を独自に勉強。
 - 1961 • 大阪市に診療所を移転。
 - 1964 • 西山英雄先生に入門。
 - 1968 • 西山先生の紹介で中島随象先生に入門。
 - 1989 • 第三医学研究会発足。
- 【山本巖の漢方療法】鶴田光敏著 参照

図1 山本巖先生の東洋医学分野年表

■ 山本巖先生と日笠の接点

日笠は1982年（昭和57年）から、兵庫県立尼崎病院東洋医学科松本克彦先生の漢方外来に陪席するようになり、1984年より同病院外来にて、漢方外来を非常勤で受けもった。同時期の1983年（昭和58年）～1985年（昭和60年）に『THE KAMPO』誌に連載された山本巖先生、伊藤良先生、神戸中医学研究会での『漢方処方臨床応用座談会』を読み、簡潔で説得力のある山本先生の発言に感動し、故豊田一先生のご紹介で1986年頃から山本先生の勉強会に参画。1989年、第三医学研究会発足時メンバーとして参加した。

■ 山本巖先生と中医学の接点

私が山本先生に出会った1986年頃には、すでに新しい独自の漢方医学への姿勢を鮮明にされていたので、中医学に親しむ山本先生を拝見した記憶がなかった。そのため今回のテーマを受けたときは惑いを覚えたが、改めて調べてみると、1977年に発行された中医学の統一教科書で上海中医学院編・神戸中医学研究会訳の『中医学基礎』に山本先生の推薦文があった。また、1980年から発行された山本巖著作『東医雑録』にも中医学的な知識が多く記載されており、1982年発行の神戸中医学研究会編著『中医処方解説』では、伊藤良先生とともに監修に参加し、「運用の実際」という臨床的応用の部分を担当している。また、1981年の神戸中医学視察第二次訪中団（団長：松田涇氏、副団長：伊藤良氏、秘書長：森雄材氏）に参加し、日本と中国の水の軟度による漢方生薬の抽出率を調査し、中醫師と交流したことが『東医雑録』に記されている³⁾。

これらのことから、1968年に中島随象先生の漢方舎に入門した頃の弟子同士である伊藤良先生の影響もあり、1977年に設立された神戸中医学研究会と歩調を合わせ、現代中医学が日本に入ってきた黎明期に、中医学を積極的に学ばれていたものと推察される。同時に、この時期の神戸中医学研究会のメンバーもまた漢方舎に入出入りしていた。『中医処方解説』には「扉の題字は我々全員の老師中島紀一先生の筆によるものである。」と記され、随象先生の毛筆が掲載されている。

■ 中医処方解説にみる山本先生の足跡

『中医処方解説』から山本先生の関与を検討してみると、代表的な方剤に関しては、《運用の実際》として、山本先生流に中医学を噛み砕き、臨床応用ができる知識を具体的に記載している。また、冒頭の《処方の運用の実際によせて》のなかで「日本漢方にもかつては曲直瀬道三が学校を作って教えていた時代もあったが、その後は徒弟制度の中で術として学ぶようになり、『口訣』なども出てきた。しかし現在では漢方を学ぶよい学問体系はなくなっている。中医学は中医師を養成するために、体系的学問として教育用に作られたものである。まずはそこから学ぶことには意義がある。」と記されている⁴⁾。

■ 東医雑録にみる中医学への眼差し

『東医雑録』には多彩な漢方知識が書かれているが、中医学に対する意見も数カ所に認められる。それらを見ながら山本先生の中医学への眼差しを考えてみたい。以下は『東医雑録』からの記載を日笠が要約したものである。

①後世方は中医学に似ている。複雑で覚えるまで時間がかかる。うまく運用するにはまず患者の状態を把握し、個々の薬物の作用を知り、薬物同士の組み合わせを理解し、患者の病態に合わせて方を組むことが大切である⁵⁾。

②中医学では弁証論治という中医用語が用いられる。日本では曲直瀬道三が察証弁治の言葉を用いたが、これは同じようなものだと考える。中医学は過去中国で発展してきた医学を総括して作られた医学で、勉強すると中国医学の概観がわかる。漢方を勉強する際に一度中医学を学ぶことは役に立つ。しかし、これは過去の中国全体の実際の医学ではなく、まったく新しい学問であると考えべきである。中医学が中国伝統医学のすべてではない。これから中国国内のあらゆる医学を結合し、さらに西洋医学を併せて新しい中西結合医学が発展すること期待する⁶⁾。

③元来は中国に同根をもつ医学であるが、中国と日本では漢方に大きな違いがある。これは日本人と中国人の性格の違いが反映されていると考える。中国人は複雑なことを好み、大義名分が大切であるが、日本人は単純を好み、実証主義を貴ぶ。この違いが両者の漢方観の違いとなっているのではないか⁷⁾。

④中国には古来から陰陽五行という思弁的ではあるが合理主義があった。多くの文化がそこから発展したがゆえに、新しい経験的合理主義への移行がなされにくかった。中医学は陰陽五行、臟腑論、病因論などがまだ主体であり、今後どのように発展していくのか、時間が必要かもしれない⁸⁾。

■ 山本先生の中医学に対する評価

山本先生は戦後、中華人民共和国で中医学が編纂された年代に、すでに漢方臨床をされていたので、この編纂の過程を見ておられたようだ。伝統的な中国医学が短期間に集大成されたことに対しては「さすがに学問の国だけあって、大したものだ。」と一定の評価をしている。ただ、広大な中国大陸の伝統的漢方はさまざままで、統一した理論に落とし込まれることへの違和感があった。同時に、新し

く作られた中医学が、中身は陰陽五行や臟腑論、病因論に終始しており、現代医学知識との相互性がないことに失望もしていた。

しかし漢方生薬に関しては、中医の生薬学は系統だった分類がされ、西洋医学との互換性もあると考え、神戸中医学研究会訳編『漢薬の臨床応用』を評価されていた⁹⁾。

■ 山本漢方の設立

山本先生は古方、後世方（特に一貫堂漢方）、中医学を深く学んでおり、そのバックボーンを考えると、伝統的な漢方の診断力や直感力には長けていたと思われる。同時に西洋医学に対する知識欲も強く、当時の消化器科開業医として、早期に胃透視、胃カメラ技術や腹部エコーも習得して臨床に用い、皮膚の組織所見も顕微鏡で見ることが常であったという。これらのことから、元来実証主義者である山本先生は、漢方所見と西洋医学所見を併せて考えながら、常に幅広く考察していたと推察される。

その視点からは、従来の方証相対を中心とした古方では現代科学的知見との相互性に欠け、次世代に継承する漢方にはなっていないと考えられた。一方、西洋医学体系も分化しすぎて、社会現象や疾病構造の変化など複雑な環境因子の変化に対応できていない側面もある。

そこで患者を診たときに、西洋・東洋の垣根を作らず西洋医学的な病因病理で考えて、漢方処方を作る。また漢方処方を現代医学的に説明するなど、両者を臨床的に役立つ形でドッキングする新しい漢方の形を提唱した。そのために日常臨床で、病態に合う漢方薬を飲ませて、5～15分でどの程度症状が改善するかななどの治験を重ね、患者にとっての適正な漢方薬や、病態を治すのに必要な投与量も併せて観察した。また、実際効果があった漢方薬と西洋医学的病態とを考察して、病態弁証を科学的言語で語られた。その基礎として、漢方生薬の薬能、生薬の組み合わせからの薬能の変化を理解したうえで漢方処方を運用し、患者の病態に適応するように漢方薬を加減・合方することの大切さを説かれている。

また、難治性病態や慢性疾患には瘀血がからんでいるという考え方をもっており、駆瘀血剤で改善する病態は瘀血であるとして、駆瘀血剤を繁用された。そのなかには腫瘍や増殖性炎症も含まれる。これは中島随象先生が「諸悪は血だ。病百のうち、百まで血で解決する。血というものを重視せよ。」といわれた教えを受け継いでいると思われる¹⁰⁾。

■ 山本漢方のまとめ

1980年から『東医雑録（1）・（2）・（3）』を出版した後、1989年に第三医学研究会を設立。その後、第三医学研究会や漢方雑誌では多くの論文を発表され、各地で講演活動もされてきた。また、存命中に鶴田光敏先生が『山本巖の漢方療法』を出版された。しかし生前、東医雑録以外の単独の著作はなく、弟子以外にその考え方が広く知られていたとは言えない。

亡くなられた後に、直弟子である坂東正造先生による『病名漢方治療の実際—山本巖の漢方医学と構造主義』『漢方治療44の鉄則—山本巖先生に学ぶ病態と薬

物の対応』、坂東正造先生・福富稔明先生共著『山本巖の漢方療法』などが相次いで出版。鶴田光敏先生の『山本巖の漢方療法』も再版され、最近改めて山本漢方が見直されてきている。

今回は山本巖先生自身が記述された資料を中心に、「山本巖と中医学」という観点からの考察を試みた。その深い漢方知識をもってすれば、患者さんを診たときに、おそらく直感的で鋭い漢方診断はすぐついたと思われる。だからこそ、不問診で病気を治す中島随象先生の一貫堂医学の世界を、誰よりも信頼し愛されていたのではないだろうか。

そのうえで、漢方診断と西洋医学的な病態・病理を重ね合わせる作業を日常臨床のなかで生涯続けられ、再現性が高い漢方処方を開示されてきた。また、漢方をわかりやすい科学的表現で解説されてきた功績も大きく、西洋医学分野からも高く評価されている。

明快な山本漢方の水面下には、深い東洋・西洋の基礎知識と、患者に向き合った努力が横たわっていると私は考えている。その実践的漢方姿勢を受け継ぐことが、われわれに課せられた宿題かもしれない。

文献

- 1) 鶴田光敏：山本巖の漢方療法 増補改訂版. メディカルユーコン, 2012, P12
- 2) 山本巖：東医雑録 (1). 燎原書店, 1980, P48
- 3) 山本巖：東医雑録 (3). 燎原書店, 1983, P131
- 4) 神戸中医学研究会：中医処方解説. 医歯薬出版株式会社, 1982, P v ~ viii
- 5) 山本巖：東医雑録 (1). 燎原書店, 1980, P31
- 6) 山本巖：東医雑録 (2). 燎原書店, 1981, P59
- 7) 山本巖：東医雑録 (2). 燎原書店, 1981, P63
- 8) 山本巖：東医雑録 (2). 燎原書店, 1981, P69
- 9) 鶴田光敏：山本巖の漢方療法 増補改訂版. メディカルユーコン, 2012, P47
- 10) 山本巖：一貫堂医学を探る. THE KAMPO 2 (5), P4, 1984. 9